



R 情報研修会テーマ「職業奉仕を再考する」(要旨)

2018-19 年度 地区奉仕プロジェクト委員会

ロータリークラブは、1905 年、全く無名で一市民であった若き青年弁護士ポール・ハリスによりシカゴの街で、たった 4 人でこの組織を立ち上げたという話は皆さんよくご存じと思います。

ポール・ハリスの当初の目的は、殺伐とし無法地帯化したこの街で、安心して暮らすため、とにかく信頼できる仲間作りが最優先であり、社会貢献やボランティア団体の構築などは当初の目的にはなかったように思います。しかし、この「互に助け合う」という**互助主義**では、「自分達のことばかり考えている団体に発展はない、狭義の活動は早期に限界が訪れ、魅力がなくなる」と、ドナルド・カーターに指摘され、後にフレデリック・A. シェルドンが唱える「最も良く奉仕する者、最も良く報われる」の精神が注入されます。

では、私達は入会の際、何を想い何の為に胸にピンバッジを付けたのでしょうか？

入会の理由は様々ではないかと思えます。戦後の復興が進むにつれて、ロータリーの活動は徐々に広がり、日本経済の驚異的発展も加わり、隠匿の美に裏付けされたステータスを兼ね備えたロータリーは飛躍的な発展を遂げます。しかし、いつまでも右肩上がりの経済成長は続くわけではありません。昭和 40 年代後半のオイルショックや証券界が震撼したブラックマンデー、更にバブル経済の崩壊など、世界経済がグローバル化することに伴い、設立当初こそはステータスによる憧れの日本ロータリーでしたが、入会基準は徐々に甘くなり、会員の倫理基準より経済活動を優先する風潮が広がりました。

本来は、ロータリーの組織規程を熟読し、素直に解釈し、素直に実行することが求められるはずですが、日本では、その創立時から社会的ステータスが強く、選ばれた人々による団体のイメージも強く、組織や理念について余り良く知らされずに入会されているようにも思えます。橋岡ガバナーは組織の長として従来の固定した観念にとらわれず「職業奉仕について再考」し、魅力あるクラブの構築から地区テーマ、RI テーマの遂行を要請しています。

皆さんはロータリーのモットー（標語）を御存知ですか？「超我の奉仕」と「最も良く奉仕する者、最も良く報われる」がロータリーの基本であり、現在は第 1 モットー、第 2 モットーと呼ばれています。第 2 モットーの「最も良く奉仕する者、最も良く報われる」はなんとなく理解出来ます。即ち、事業を行う上で「常に相手が満足するように行えば、事業は発展し、必ず報われますよ」という教えですね。（皆さんもこの精神で事業を实践されたゆえ、会社は発展し、現在ロータリアンとして活動されておられます）

一方、第 1 モットーに掲げられている“Service Above Self”は「超我の奉仕」と訳されますが、私にとってとても難解な言葉です。この言葉を理解するには、まずサービス“Service”という単語を単に「奉仕」と訳さず、「サービス」のままにしたらと考えます。ただ、日本でサービスというと「無料」「タダ」「オマケ」「値引き」などの意味が主で、加

えて何かをしてあげるといふ「人的労力の提供」なども含まれますが、諸外国ではもっと広い意味で使われており、「社会に役立つ価値の提供」や「世のため人のために尽くすこと」を表す言葉として“Service”という言葉が使われていることに留意しなければなりません。ですから、“Service Above Self”は日本ロータリーの創始者であられる米山翁が訳されたように「自己に先立つサービス」とか「サービス第一、自己第二」くらいに訳せば解り易いかと思います。皆さんはこのことを当然の如く、実践実行されておられるからこそ、胸にピンバッジを付けておられるのではないのでしょうか。

そして、私達はロータリアンとして次に掲げる目的を達成すべく入会を許されています。それは全世界でのロータリー全体の規約「国際ロータリー定款」第4条と各国各クラブでの規約「標準ロータリークラブ定款」第5条に“Object of Rotary”という言葉で明確に示されています。日本語訳では「ロータリーの綱領」から「ロータリーの目的」に修正されたものの原文は「Object Of Rotary」で変わっていません。

では、「ロータリーの目的」「Object Of Rotary」とは「意義ある事業の基礎として、奉仕の理念を推奨し、これを育むことにある」これがロータリーの目指す目的です。

私たちが先輩から教えられた最も大切にすべきロータリアンとしての**基本理念**“The Ideal of Service”は、ロータリーが考え続け、実践してきた究極のサービスであり「利他」即ち、相手への思いやりを持ち、自らは「自戒」の心を育み、それを行動で実践することこそ私達を目指す原点だということでしょう。「自分だけではなく他の人にも利益を」という考えは、様々な分野の活動を擁するようになり、ロータリーの活動全般に適用されるようになります。それに伴い、「利益」は商売上の利益だけではなく、「人道的」な利益という概念発展してきました。そして、ロータリアンが最も心掛けるべき「Service」を端的に表現した言葉としてモットー（標語）と言われるようになりました。これを見ても、ロータリーが最も重要視する「Service」と、日本語になった「奉仕」とは若干意味するところが違うように思えます。基本を徹底的に考察したうえで「今」を再確認しないと、正しい姿は見えないということでしょう。では、中身の「奉仕の理念」とはいかなる意味でしょうか？「ロータリーの目的」は、国際ロータリー定款（定款とは会社や法人の基本的決まり）第4条と標準ロータリークラブ定款第5条に同じ言葉で明記されています。主文は「**意義ある事業の基礎として、奉仕の理念を推奨し、これを育むことにある**」とあります。定款では主文の後に具体的な説明として、4項目（方法）が記載されています。この4項目は以前、四大奉仕と呼ばれていた奉仕部門と一対一に対応しているわけではありません。単なる説明文に過ぎず、決して目的が4つあるわけでもありません。各クラブの標準ロータリークラブ定款では同一条文が第5条に記載され、第6条に実行すべき具体策として5項目が明示されていますが、国際ロータリー定款には記載されていません。それを“The 5Avenues of Service”=5大奉仕部門と呼んでおり、以前は4大奉仕と呼ばれていました。よって、ロータリアンの基本的な考えは五大奉仕に共通する「Service」=「奉仕」です。この五つの分野は並列で考えるべきで「どの道を通っても到達点は一緒」が5Avenuesの考えだと思います。

このことは、2016年の規定審議会で「ロータリーの目的」に青少年を追加しようとする国際ロータリー定款立法案が否決されたことから理解できます。

ロータリーの目的にある「奉仕の理念」とは、相手のために自らが持つ能力を出来る限り

捧げること、即ち「利他」の精神が奉仕する者の自らの幸せに繋がるロータリーの究極の目的になったように思えます。ですから、現実不可能かも知れない「奉仕の理想」からより強い「奉仕の理念」という日本語に書き換えられたと思われます。

2016年の規定審議会で、現在5大奉仕になった“5 Avenues of Service”ですが奉仕の第2部門を改定する立法案が16-10号として提出され「採択」されました。具体的に「奉仕の第二部門である職業奉仕は、事業及び専門職務の道徳的水準を高め、品位ある業務はすべて尊重されるべきであるという認識を深め、あらゆる職業に携わる中で奉仕の理念を實踐してゆくという目的を持つものである。会員の役割には、ロータリーの理念に従って自分自身を律し事業を行うこと、そして自己の職業上の手腕を社会の問題やニーズに役立てるために、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる。」との改正案です。

上記改正案の日本語訳では、具体的に明記されていないように読み取れることから、「職業奉仕」が改めて様々な捉え方をされてきたように思えます。しかし、世界的には、自分の職業から得たスキルを生かした奉仕活動も、クラブが計画推進する奉仕活動も全て立派な「職業奉仕」活動として実践報告されています。私達が考える「職業奉仕」とは、クラブ奉仕も、社会奉仕も、国際奉仕も、青少年奉仕も、同次元で捉え、委員会同士が互いにサポートしあい、広域的サービスという大きな枠で括ることで、クラブであれ、個人であれ、ロータリーの目的である「奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある」に通じる、と結論付けるべきと考えられます。

ロータリーは、200以上の国家、120万人を超える人々が集い、組織されています。国家や民族としての考え方、思想、文化など違う人々を一つに纏めるなど、到底不可能でしょうし、これだけ組織が大きくなると価値観さえ多様化します。でも、同じ価値観を持つ同志が寄り添い、互いの自治幅を広げ、半独立組織を形成するようになるでしょうから、RIは連邦政府のような役割を担って、各グループの調和を図ってゆく組織にならざるを得ません。

さて、ここまで様々なお話をさせて頂きました。ただ再三申しあげますが、ロータリーに正解というか、こうすべきなどという唯一絶対の方法論などはある筈がなく、ロータリアン一人一人が考え実行することが大切だと思います。冒頭、お話したように、1905年に誕生した国際ロータリーは1世紀を経て、日本ロータリーも2020年には創立100年を迎えます。世界情勢は日々刻々と変わり、今もナイジェリアは東西陣営の代理戦争の渦中にあります。アフリカでは未だ飲料の確保に汲々としており、世界のいたるところで、文字の読み書きに不自由な人達も存在します。人種差別もしかりです。

私たち日本のロータリーが負うべき国際的課題は、まだまだ多々あり、地区内社会的課題も山積です。それらをクリアーするためには会員増強は効果的であり、今日までロータリーは様々な改革を行いつつ、そして、今、私達がいます。中身や理由を探ろうとせず、言葉やセンテンスだけを取り上げ、論じようとしてもしない姿勢では「不易流行」に繋がらないように思います。言い方を変えれば、「今、起こりつつある変化は、何故起こりつつあるのかを求める姿勢が必要ではないかということです。RIの方針や方向性を自分のこととして捉え、他者の意見に耳を傾け、自らの考えとの調和を図ってこそ、私達が目指すロータリーの神髄を感じ取れるように思えるのですが、皆さんはどうお考えになりますか？